岩手県東日本大震災津波復興委員会

復興からのまち育て

北原　啓司
（弘前大学／日本都市計画学会東北支部長）

1．まち育ての時代

★そもそも、復興の専門家などこの国にはいない

参加型まちづくり、防災まちづくり
中心市街地活性化計画、景観まちづくり・・・
↓
ここまで規模の長期化する
復興まちづくりの専門家は希有
関東大震災も空襲も経験していない

神戸の小林郁雄さんが4年前に発した言葉
「自分らの経験なんて、
ここでは訳に立たんと思う・・」
→経験者だからわかる本当に必要な知・術
→知ったかぶりの専門家に
絶対にわからないもの・・・

現代社会は、今ある資源を再生して活用する時代
ストック
⇒　自分たちの空間を育てていくという発想
「 まち育て 」

Development → **Management**
一時的　　継続的

「まちづくり」 → 「まち育て」
子づくり　　子育て

しかし、4年前の大震災で
ストックもフローも、一瞬にして消えてしまった

ストックの重要さを再認識する前に、消失
○そもそも、その場凌ぎの開発の延長で
ストックはどう映っていたのだろうか？
○その気があっても、諦めていたのでは
ないだろうか？

フローを十分に活かす時間のないままに、消失
○そのフローは良好なストックになり得た
のだろうか？
○時間とともに魔法が消えて、お荷物に
なり始めてはいなかっただろうか？

でも、本当に、ストックを失ってしまったのだろうか

★神が守ったのか、神を守ったのか！？

★ストックの「いのち」を守った一本の線

こういう知恵を軽視して、開発を続けてきた・・・

2. 復旧から復興まちづくりへのシフト

（1）初期復旧時

発災直後・・・被災者に「寄りそう」！？
呆然と佇む被災者の心の痛みを理解し、
下を向く彼らに空を見せることのできる専門家

どんな予算や制度がつくられるのかが不明
現場に寄りそう形で、背中を押すタイミングと
手を動かすタイミングを待ち続ける専門家

復興という目的に向かって生き続けようとする人々の
居住環境を整えながら、先のことを自分たちで考える
余裕を生み出していく

（2）復興事業初動期

突如動き始めるインフラ復旧に対する支援
制度を運用していくための学び
専門用語や法制度特有の言い回しを翻訳
自分たちの頭で理解できるように支援

〇行政担当者
制度を活用できるように、条件の調整に終始
〇被災者
交付金は喜ばしいが、先の生活は不明
単に制度の活用がゴールに！

★例えば、仮設住宅を考えてみます

災害救助法の限界
避難所から仮設住宅（応急仮設住宅）へ
地震や風水害等の自然災害により、住宅を
失った被災者に一定期間貸与される
↓
恒久住宅に移動するまでの時限的応急措置
↓
努力する日本国民は、必ずや住宅を持つ！
→ 税金を使う根拠

空間としては「仮」であっても、そこでの生活は「実」！
〇入学式を迎えた子
〇人生の最期を迎える人々　等

★復旧から復興へつなげていくための新しい考え方とは

＜実の住まいとしての仮設住宅＞
仮設住宅であっても、「私」の「場所」という意識
「私」にとって 大事な「場所」
「私」が想いを込める「場所」
「私」が自由に使える「場所」 etc.
ところが、仮設住宅では
・DIYで住宅を改善することは無理
釘一本打ってはダメ！
・家のまわりに花を植えたり、植木鉢は置ける？
できれば、何もしないで欲しい
↓
居住者に自由はない→希望が育たない
「場所」を育てる意欲

（3）復興まちづくり推進期

夢を形にしてする

イメージを、形にして見せてくれる専門家

行政はできるだけ早く出すことを切望

しかし、被災者は形を欲しがっているのか

夢のような絵にリアリティを感じられるか

意見の対立の中に光を見出す支援！？

早急復興を考え、計画案に異論を唱えることができなかった人々

時間の経過とともに、違和感が大きくなる

自分たちの将来の姿と重ならない

時間の少ない場面であっても丁寧な協議のプロセスを提起し、その対立の中に光を見出す力量

（4）これからの復興

復興による巨大フローの行く末

このままでは不良ストックに！

これらからのまち育ての中で、どう使い倒すか

①防災集団移転事業

想定したよりも区画が埋まらない

復興事業の失敗だとマスコミが論じる

経験の全くない行政

疲労困憊のコンサル

失敗と切り捨てることに意味はない

「失敗ではなく、やり直せばいいのです」

↓

計画見直し＝失敗という短絡的思考からの脱皮

②「スマートシティ」関連の補助金活用

ランニングやメンテナンスについての財源

「そのうち何とかなるだろう」

単に太陽光発電の設備を設置することだけが先行

間違いだらけのスマートシティ論！

本来のスマートシティ構想

市民のQOLを高めながら、健全な経済活動をうながし、環境負荷を抑えながら継続して成長を続けられる、新しい都市づくりの姿

市民が積極的に参加し、各自が描く将来像を共有し、各自の知恵を出し合いながら形作る

いま被災地では、手段がメインに陥っている

「場所」の将来像よりも、スマートシティの選択

よくわからないままに、

スマートな選択を余儀なくされる自治体

本当に持続可能な施策が登場しない

〇〇のための事業をしていきたい

↓

〇〇であれば交付金が出るから選ぶしかない

『逆立ちの計画』蓑原敬（2012）

今に始まったことではない！

復興交付金が終了する時代

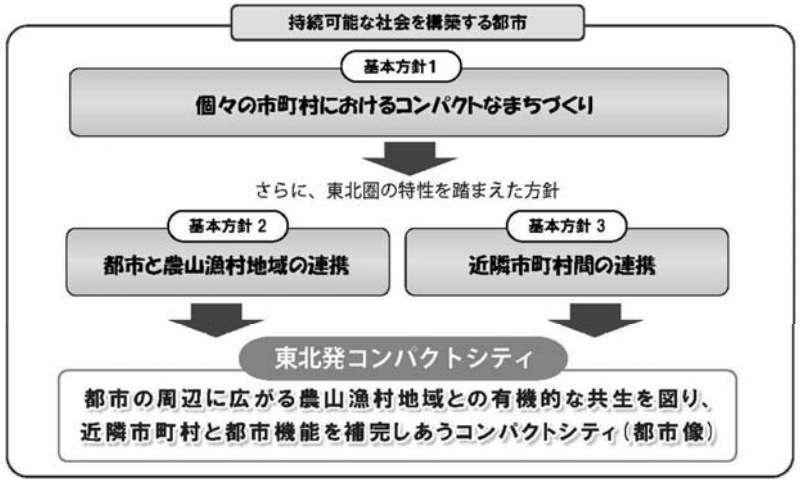
復旧メインの土木政策とは異なる

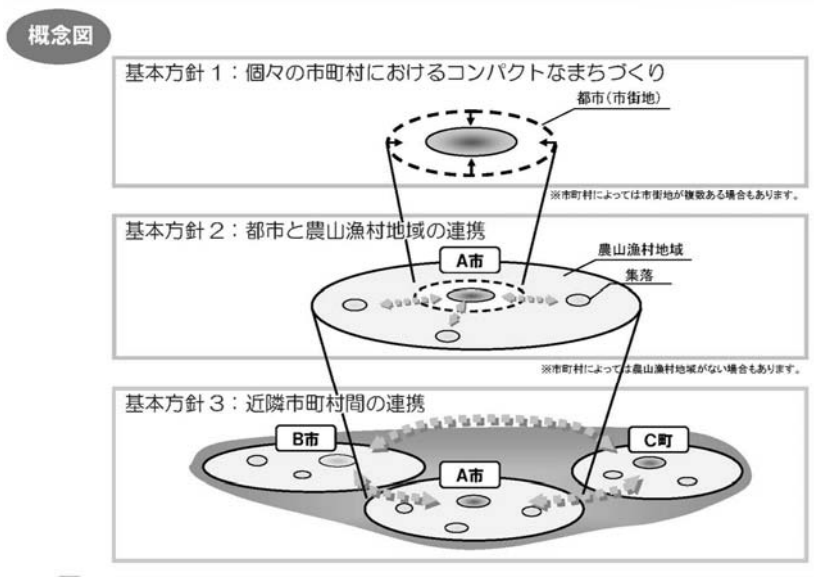
まち育てのための政策が必要になる

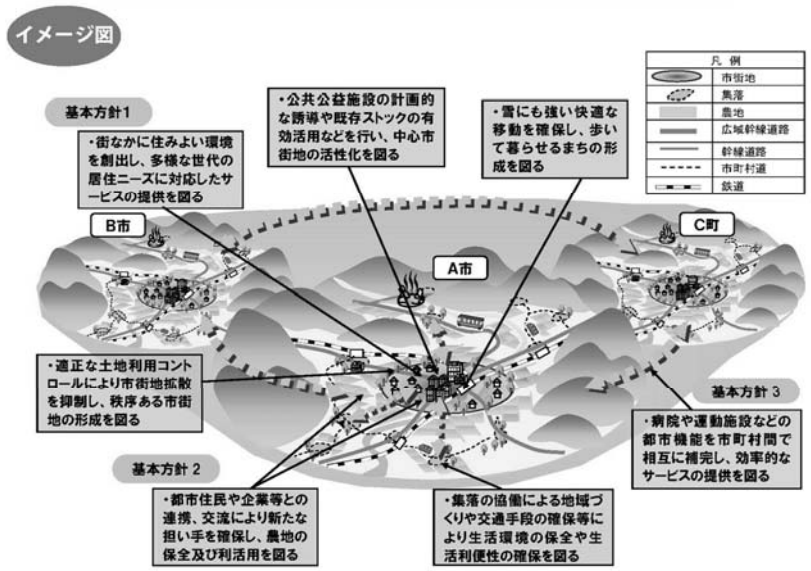
↓

新しい東北の時代を構築していく機会の到来

『東北発コンパクトシティ』







3. 私がこれから支援すべき課題

①未曾有の大災害で突如組織化された復興行政
非常時・・・横断的なチームが組織化される

↓

平時の組織構成に戻して復興まちづくりに対応
とりあえずの「空間」を生み出すための工夫を
続けてきて、それを手に入れる目処がついた所で
それを「場所」にする二段ロケットに点火すべき時
責任が分散化される旧体制に戻ってしまう

大災害がなくても必要だったはずの横断的組織作り
国の手厚い（？）補助の期限が迫っている段階

↓

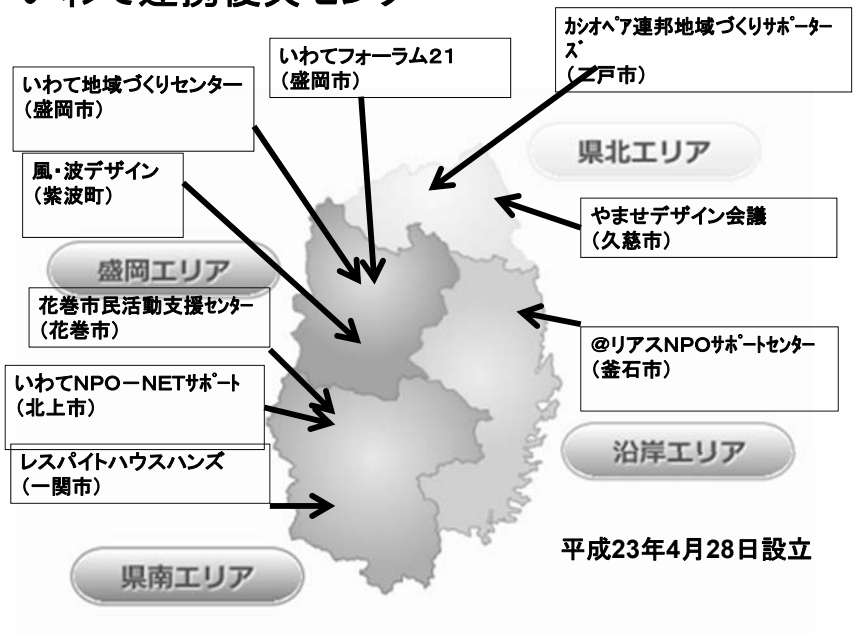
地域人による自律的な復興まちづくりの体制

②孤立する専門家や多様な活動主体

専門家：確としたノウハウを持ち得てはいない
支援する各現場で生み出されつつある特殊解を
何とか普遍解にしようとして、文章化したり様々な
現場で言葉にする → ある種の孤立感

きたかみ震災復興ステーション
復興住まい・まちづくり部会のメンバー
いわて連携復興センター（鹿野順一理事長）
北上市（高橋敏彦市長）
日本都市計画家協会（小林英嗣会長）
日本都市計画学会（岸井隆幸会長）
孤立感から専門家たちを解き放つための
情報共有の場およびネットワークの構築

いわて連携復興センター



平成23年4月28日設立

4．やっと見えてきた事前復興の本質

「事前復興」という言葉に対する若干の誤解
事前に始める復興まちづくり？
被害を受ける前に復興などあり得ない！
いわゆる防災訓練と何が違うの？
↓
自律的防災力を災害が起きる前に高めておく

ここで本当に必要なのは
①復興対応力の育成
自治体だけではなく、住民の側にも必要
②災害復興に関連する各種法制度の見直し
課題や隙間を指摘して、改正しておく
「見なし仮設」の位置づけ

③地域のサスティナビリティと本気で向き合う眼を
如何に地域で育てておくか

災害前から、地域の持続可能性は不安だらけ
→住民も行政も答を先延ばしにしてきた
補助金や支援制度を頼りにしてきた体質
↓
自律的に復興に向かう地域内での組織化

困って初めて考える地域の組織化ではない！
神戸市の真野まちづくり協議会の経験
↓
平時の仕組みが、緊急時の迅速かつ住民自らの
まちづくり活動につながっていくはず

5．復興まちづくりが直面する大きな課題

（1）復興ストックの将来的マネジメントの支援

①復興公営住宅の巨大ストックの行く末
阪神や中越の経験が活かされていない
公営住宅法から決別する独自の考え方！？

②フローのための交付金・補助金行政の限界
ランニングコストが膨大になりそうな
スマートシティ？
県は、それをどう考えるのか

今こそ、復興のファシリティ・マネジメント（FM）
POEの発想
Post Occupancy Evaluating

（2）居住禁止区域のマネジメント

住んではいけない場所に将来像はないのか
4年経って、真剣に悩み始める人々
防災集団跡地に将来は描けないのか

★大船渡駅周辺で進行中の
エリアマネジメント事業
マネジメント＝育てること
〇野球部のマネージャー
〇アイドルタレントのマネージャー
〇究極のマネージャーとしての親

育てる政策に慣れていない自治体
儲ける政策に慣れていない自治体
紫波町はちょっと違いますが・・・・

※居住禁止区域を違う視点で考えてみる

所有者は誰？　自治体
市民が持てない土地
市民が所有権のこだわたない土地

いま、まち育てに必要な発想は、所有権の流動化
定期借地権・・高松市丸亀町商店街
オガールも所有よりは利用を重視
↓
郊外住宅団地の将来にも共通
松園団地

所有よりは、利用を中心に考える絶好の機会
それが、エリアマネジメント！
いま、できないなら、ずっとできないかもしれない

（3）参加型まちづくりの可能性

早期復興を理由に軽視せざるを得ない「参加」
「参加」が絡むとお金も時間もかかる！？
交付金を目当てにした事業スキーム
時間という制約が強烈な存在
早期復興待望論
本来時間をかけた上で進めていくべき
まちづくりのプロセスを省略してしまう
↓
1980年代後半からの参加型まちづくりの
蓄積が、全く活かせない

宮古で始めてみました

［宮古市中心市街地拠点施設整備事業］

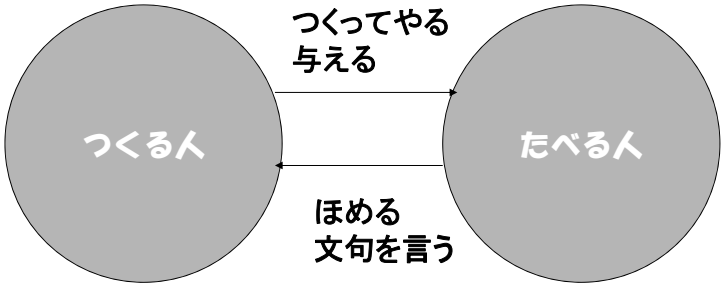
まちづくり市民会議
～まちに、もっと、賑わいを！～

まち育てのススメ

弘前大学　北原啓司

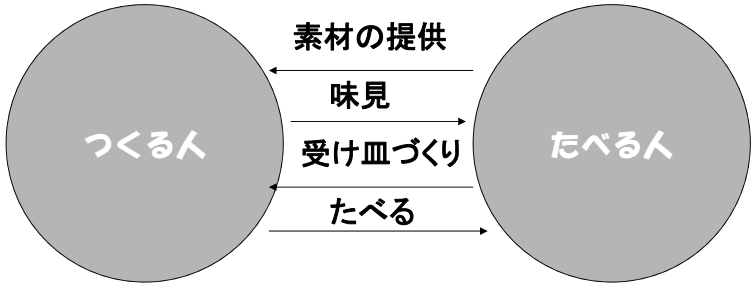
1．「まち育て」のススメ

※これまでの「参加」
まちづくりの主体は「つくる」人



「　形だけの参加　」

★これからの参加　・・・まちを「たべる」ための参加



「つくる」人と「たべる」人との新しい関係
↓
参加は武器（イベント）ではなく、<u>こだわり</u>
「たべる」人の誇りと責任

2. まちの物語を育てるために大切な目線とは？

★「まちづくり」が陥る大人の「上から目線」

★「まち育て」に必要な子供の身の丈目線

★女の子の眼差しを、復興の「まち育て」にどう生かすか

空間の提案ではなく、地域で味わう物語の提案

※上から見るまちづくり　→　舞台の配置を考える
- ○ここは、住んではいけない場所
- ○ここで、仕事をしてもらいます！

※通りを歩く目線を大事にするまちづくり
- ○歩いているのは、誰なのか
- ○どこで、なにを見てみたいのか
- ○なぜそこに、こだわってみたいのか
- ○そこで、どんな出来事が生まれそうか
- ○どうやって物語をつなげようか

3. 「場所」にこだわる「まち育て」

復興まちづくりに、いま、本当に必要な視点とは

まちを「たべる人」の視点！

↓

○自分たちでまちを何とかしたいと考える人
◎自分たちの「場所」を持ちたいと考える人

「空間」に人々の想いと
活き活きとした行為が加わると、
そこは、「場所」になる

★「まち育て」は、「空間」を「場所」に変えること
→ 「場所」って、なんだろう？

だって、ここ私たちの、「場所」だもん！

こんな言葉を、皆さんも言ってみたくありませんか？

市役所の跡地の〇〇〇〇に、いつも学校帰りに寄り道する高校生の一言
「だって、ここ、俺たちの場所だし～」

末広町のポケットパークで、一時間もしゃべり続けている元気なおばあちゃんたちの一言
「この場所は、なんだか長居してしまうんだね」

新市役所にいつも午前中に来ている、若いお母さんたちの一言
「気がつくと、来てしまうのよね、この場所」

そうです、このワークショップの目的は、

宮古市の中心市街地に自分の「場所」を持つ

自分の ≠ 自分が所有する
　　＝ 自分が育てたい

現在の市役所から、商店街、駅前、自由通路、そして新市役所（いろいろな複合施設）までのつながり
↓
そこにどうやって自分の「場所」を持てるのか

そんな皆さんの個人的な想いが集まることによって宮古市民にとって大事な「場所」が編集されていく！

さあ、そんなプロジェクトを、始めましょう！

いつやるか！？

6. おわりに

復興まち育ては、平時のまちづくりへの移行
補助金ではなく、エンドレスに続けるまち育て
気持ちだけではなく、金銭的にも持続させる

新たなフローをどんどん生み出す復興
だからこそ、ストックマネジメントの発想
いまつくるフローは、いずれストックになる
復興まちづくりのFMこそが、まち育て

国や自治体が将来を描く復興から
市民が自分たちで描くことのできる復興へ
復興の成否は、そこにかかっている
震災で遅れた時間を、そこで取り返す発想！